開催にあたって

J. W. ハイジック
James W. Heisig

このシンポジウムのテーマ「宗教研究の新たな動向」については、説明や理由づけはほとんど必要ないでしょう。宗教現象を扱いながら交叉する多種多様な学問分野のどれに携わる人にとっても、この宗教という主題が今なお私たちを圧倒していることは明らかです。1世紀にわたって努力が傾けられ、宗教研究の確立以前に人類が書き記してきた宗教文献を集めたものよりも、はるかに多くの研究成果が刊行されてからかなりの時間が経ちますが、私たちが手にしている理論的な構築物の最良のものであっても、宗教そのものの複雑さと神秘には依然としてとうてい太刀打ちできるものではありません。専門家が微に入り細をうがとうと目を凝らそうとも、評論家がもっとも辛辣な批判を浴びせようとも、また最強の支持者からの後押しを得ようとも、相も変わらず宗教は、人間文化のいかなる側面にも劣らず、合理的な理解を寄せ付けぬまま立ちはだかっているのです。千年紀の終わりに当たり、宗教心はいつも以上に熱く沸き上がるのではないかとも考えられますが、そうした今日であればこそ、自分たちの行く末を考えるために立ち止まり、取りうる選択肢のそれぞれについて判断を下してみるのは至極当然のことでありましょう。

しかしながら同時に、学問的な関心から現代に生きる宗教を観測しようとする際に、宗教の歴史的な痕跡や記録に向けてきたのと同じまなざしを向けるのでは充分ではないという事実を、私たちはますますはっきりと意識するようになっています。書籍や雑誌、学部や課程、そして研究に捧げ

られた人生といった、この学問の広大な領域のどこかに―そうした道具や制度の中のどこかに―過度の狂信を制御し、真の宗教的情熱を現代の切迫した諸問題へと向けさせるために、宗教諸学が努力を払う余地があるはずです。宗教研究の新たな動向について語っても、数々の新たな動向への宗教そのものの参与について語らないままでは、どうしても物足りません。生ける精神的・霊的諸伝統が文化的、また制度的に影響を及ぼしうる範囲はさまざまでしょうが、いずれにせよ、地球環境の保護、現代の兵器類の脅威、一政治経済体制による別の体制への組織的な弾圧と隷属化、他の宗教の方途に含まれる真理と誤りといった事柄に対して、そうした精神的諸伝統が注意深く耳を傾けるかどうかは、人類文明にとって無関心な問題ではありえません。宗教の教理そのものからの導きとは別に、宗教研究者たちの大陣営からも何らかの方向づけが期待されていると言っても、まず驚くべきことではないのです。宗教研究が宗教を必要とするというのは、かねてより自明のことでしたが、宗教が宗教研究を必要としていることは、宗教の名の下で広く行われている暴力を考えてみることで初めて問題になるようです。しかしながらその場合でも、納得する人の数はわずかです。確かに今こそ私たちは、宗教研究の必要性についてより積極的で建設的な理由を探求すべきなのです。

このシンポジウムの基になっている発表原稿は―おそらく偶然に過ぎないことでしょうが―、それぞれ日本側とアメリカ側の参加者を代表とする二つのアプローチに分かれています。

土屋教授と竹沢教授は、過去1世紀に宗教学の先駆者たちがし残した課題を成し遂げることを考えながら、宗教研究の将来を見つめています。方法論が進展し、今日、よりすぐれた研究手段を意のままにできることを認めながらも、お二人はそれぞれの論じ方で宗教研究の歴史が必ずしも進歩的な歴史ではないと述べています。彼らにとっては、この学問分野の現状について批判すべきことの多くは、過去から受け継がれた方法と焦点に含まれている根本的な諸問題と、うまく折り合いをつけることができないことから生じていると捉えられています。

対照的にサリヴァン教授とカラスコ教授は、宗教そのものにおいて起こりつつあることを見据えることで、宗教研究の将来の動向を読み解こうとしています。宗教研究を取り囲む歴史的な枠組みは、何よりもまず、学問それ自体の個々の展開によってではなく、この学問の主題である宗教によって提供されるものなのです。宗教とそれに関わる学問との間の境界線はそれほど厳密に定められるものではなく、その結果、社会に対する研究者の貢献は、時には一種の宗教行為の特質を帯びることもあります。

これら二つのアプローチの違いは、科学的客観性と参与的主観性との区別よりも、さらに深いところまで達しています。ここに収録された発表原稿は、客観性というまさにその概念自体、けっして完全に客観的ではなく、つねに特定の文化的、歴史的な性向によって影響されているということをわきまえていなければ読めるものではあり

ません。その上、両アプローチを矛盾し合うものであるとか、宗教研究を停滞させ、その前進を妨げる解決できないジレンマであるとかと考える場合には、両アプローチの違いを誤って理解することになります。それらはむしろ金槌と金床のようなものだと言ったら、私がそう思いついた時と同じく、多くの方々にも確かに合点が行くことでしょう。というのも、宗教という豊かな炉から引き出されたいかなるものであれ、理解しうる形へと打ち出すためには、それらはともに欠かせず、また補い合う道具だからです。

発表原稿に対するコメントでは、それぞれのレスポンデントが、こうした点はもとより、その他の点についてもいっそうはっきりと述べています。シンポジウムの議論を進める上で、これ以上ふさわしい拍車は思いつけそうにもありません。

どのような動向を追究すべきで、どのような動向は他の学者にゆだね、そして宗教研究の務めにふさわしくないとして、どのような動向には抗すべきか、私たちの世代と次の世代の宗教研究者たちは、はっきりと選択を下すことになるでしょう。こうした問題に対して、少なくとも幾筋かの光を投げかけることができるのであれば、このシンポジウムは目的を達したことになります。最後になりましたが、南山大学と日本宗教学会第58回学術大会実行委員会を代表して、この企画を実現するためにご尽力くださったすべての方々に厚く御礼申し上げ、開会のご挨拶とさせていただきます。